

平成21年度 児童生徒の平和に関する図画作文コンクール
作文の部 <講評>

今回、行政の立場から平和行政推進事業として企画された『平和に関する図画・作文コンクール』は、平和メッセージの発信と平和教育の推進という二つの観点から大きな意義があり、子ども達の作文も総体として、それに沿う内容になっている。

一つに、子ども達は、学校での平和学習、戦争遺跡の追体験、戦争体験者の体験談を聞くなどの多様な経験をしている。その子ども達が作文という創作活動を通して、平和について考え、『友達と仲良くする、命を大切にする、平和を願う、不戦や非戦の誓いを新たにす』など、平和を創造することの大切さを学び、平和への思いを作文で発信している。

もう一つは、学校教育の課題は、基礎的・基本的な知識や技能そして思考力・判断力・表現力などの学力を身につけさせることにある。これまで漠然としていたことが、今回の書く活動を通して、子ども自ら思考し、考えが整理され、文章の組立てや表現方法を工夫するなど、正に思考力・判断力・表現力の育成に資する貴重な企画で、子ども達の平和への関心と意識の高まりが読み取れたことは大きな成果である。また子ども達が本事業の趣旨を理解し、戦争の教訓から学び、創作活動へ前向きに取り組む姿勢を評価したい。

※ 審査については、内容を重視し、表現方法、小・中学校の発達段階も加味しながら、慎重に審査し、下記の記述のとおり、結果報告と感想にしたい。

1、入賞者については、村長賞（1名）教育長賞（1名）優秀賞（5名）入選（11名）計18名が入賞。内訳は、中学生7名、小学生11名。 <応募総数95名>

総体的に、子ども達に本事業の趣旨がよく理解され、内容も趣旨と合致した作品が多く、子ども達の作文に取り組む前向きな姿勢が素晴らしい

2、特に、村長賞の作品には、語り部がだんだん減っていく中で、想像を絶する沖縄戦の実相を祖母の体験から聞き、平和への誓いを新たにし、命の尊さを身を以て教えてくれた祖母の思いをしっかりと伝えていきたいという決意と平和を創造していくために自分は、何ができるかを真剣に考えている姿勢に心強さがあり、頼もしい作文である。

3、村内小・中学校でのガマの追体験や平和学習の様々な取り組みも数多くあり、中でも教育長賞の作文に『戦争は、正常な判断を奪う』という一文に衝撃を受け、平和のありがたさや毎日が幸せでいられることに感謝し、将来、人の役に立つ人間になりたいと心強く結んでいることも思いの伝わる作文である。

4、沖縄戦を図書館を活用し、書物で調べ、実相や情報を把握し、平和や戦争について考え、自分の思いや決意をしっかりと表現している作文も多々あった。

5、小・中学生とも戦争を書いた本（体験談や物語など）を読み、読書体験を通して、教師の話や授業で学んだことを通して、平和のありがたさや命の大切を知り、その思いを作文に表現している子もいて、平和への関心と意識の高まりを見ることもできた。

6、小学校の低学年では、発達段階を踏まえ、身近なところから『友達と仲良くする』『命を大切にする』などの人権教育の視点で考えさせる積極的な取り組みも考えてみてはどうだろうか。 <低学年の応募増への期待>

7、原稿用紙の使い方、句読点の打ち方、誤字・脱字等の点検、文章の校正を丁寧に指導する等基本を大切にしたい。 <作文指導への期待>

<審査員一同>